

所長あいさつ

令和5年度 所報「ばんだい No. 58号の発刊にあたりご挨拶申し上げます。

令和5年度も新型コロナウイルス感染症の影響でのキャンセルがありましたが、6月頃から学校利用も増え、本所にも少しずつですが活気が戻ってきました。



教育事業では13泊14日で青少年の食育と運動習慣づくりを目的とした「アクティブ・ジオキャンプ」や、東日本大震災から復興している福島県の現状を知り、未来を考えさせ、行動できる青少年の育成を目指す「福島子ども未来塾」は予定通り実施することができました。この他にも子ども食堂と連携した「生活自立支援キャンプ」、高校生を対象とした「地域探求プログラム」、家族での体験活動を推進することを目的とした「スマイルばんせい」等、多くの事業を予定通り実施することができました。

また、ほとんどの教育事業で定員を大幅に上回る応募があり、子供たちが体験活動の機会を求めていることをあらためて確認しました。よりよい体験活動の提供に今後とも努めることが必要であると考えております。

令和5年度に実施しました教育事業等の報告をまとめたものが、所報「ばんだい」No. 58号であります。皆様におかれましてはぜひご一読いただき、ご意見やご批評をいただければ幸いです。

結びに、今年度ご利用いただきました皆様、ご支援をいただきました研修指導員・体験活動指導員の皆様や法人ボランティアの皆様など、関係者のすべての方々に衷心より御礼申し上げます、あいさつといたします。

令和6年3月

独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立磐梯青少年交流の家 所長 小野 保

施設紹介

国立磐梯青少年交流の家について

“山と湖の磐梯”

団体宿泊訓練を通じて健全な青年の育成を図るために、国立磐梯青年の家は国立青年の家の3番目の施設として、昭和41年5月に開所した。平成18年4月からは独立行政法人国立青少年教育振興機構国立磐梯青少年交流の家として新たなスタートをきり、平成28年5月に50周年を迎えた。

当施設は磐梯朝日国立公園の磐梯山麓南面に位置しており、猪苗代湖や裏磐梯の多くの湖沼群など、山と湖と森の豊かな自然に囲まれた青少年教育の拠点として、年間を通じて福島県内はもとより、関東・東北地方を中心に多くの青少年や青少年教育指導者等が自然体験活動やスポーツ・芸術文化活動などの研修で利用している。



～所報58号目次 CONTENTS～

◇所長あいさつ	
◇施設紹介	
I 令和5年度 国立磐梯青少年交流の家 施設運営・グランドデザイン・教育事業等方針	1
II 令和5年度のあらまし	7
III 令和5年度 教育事業等	
1 令和5年度 国立磐梯青少年交流の家教育事業実施一覧	11
2 次代を担う青少年の自立に向けた健全育成事業	
（1）モデル的事業（特色あるプログラム・実践研究事業）「アクティブジオキャンプ」	12
（2）課題を抱える青少年の支援事業（生活自立支援キャンプ） 「磐梯オータムキャンプ」「子ども食堂スノーキャンプ2024 in 磐梯山」	16
（3）全国高校生体験活動顕彰制度オリエンテーション合宿 「地域探究プログラム」（学校・団体参加型）	18
（4）社会の要請に応える体験活動等事業「イングリッシュキャンプ」	19
（5）地域ぐるみ事業「リオン・ドールキッズプロジェクト」	20
（6）地域ぐるみ事業「スマイルばんせい」	21
3 青少年教育指導者等の養成事業	
（1）ボランティア養成・研修事業「ばんボラセミナー」	23
（2）ボランティア研修・自主企画事業「ボランティア自主企画」	25
4 東日本大震災復興支援プロジェクト「第9期福島こども未来塾 第1～6回・特別回」	26
5 福島「体験の風をおこそう」運動実行委員会事業	
（1）スマイルばんせい	33
（2）地域のイベントや他施設での「体験の風をおこそう」運動普及啓発活動	33
（3）「早寝早起き朝ごはん」国民運動普及啓発キャラバン	33
（4）子どもゆめ基金説明会	34
（5）その他	34
IV 令和5年度 研修支援等	35
V 施設概要	
1 職員組織	36
2 国立磐梯青少年交流の家のあゆみ	37
◇ご協賛・ご協力いただいた皆さま	40

I 施設運営・グランドデザイン・教育事業等方針

令和5年度 国立磐梯青少年交流の家の施設運営について

独立行政法人国立青少年教育振興機構法

↓ (機構の目的、中期目標管理法人、業務の範囲等など)

独立行政法人国立青少年教育振興機構に関する省令

↓ (業務方法書、中期計画、年度計画、業務実績報告、財務諸表など)

独立行政法人国立青少年教育振興機構業務方法書

↓ (業務の方法についての基本事項を定めたもの)

中期目標【第4期 令和3年度～令和7年度(2021年度～2025年度)】

↓ (独立行政法人国立青少年教育振興機構が達成すべき業務運営に関する目標
文部科学大臣指示)

中期計画

↓ (中期目標を達成するための計画 文部科学大臣認可)

↓

↓

↓

↓

↓

↓

↓

↓

↓

ミッション：青少年教育の振興・健全な青少年の育成
ビジョン：青少年一人ひとりが幸福を追求できる持続可能な社会を実現する
バリュー：
Curiosity, Change, Challenge, Care, Communication, Collaboration, creativity

↓

令和5年度年度計画

↓ (中期計画を達成するための業務運営に関する計画)

↙

令和5年度国立青少年教育振興機構教育事業等方針

↓

令和5年度国立磐梯青少年交流の家教育事業等方針

国立磐梯青少年交流の家施設運営協議会 年2回

福島「体験の風をおこそう」実行委員会 年2回

国立磐梯青少年交流の家グランドデザイン【長期的な計画・展望】

～2025年

ビジョン【2025年になってほしい姿】

青少年及び青少年教育指導者に対する体系的な研修の実施

(教育テーマ) 健康的な生活習慣のきっかけ作り～(食育)(運動習慣づくり)～

(キャッチコピー) 山と湖の磐梯

ゴール【ビジョン到達を証明する指標】

指標1

利用者のニーズに応じた活動プログラムの確立

指標2

法人ボランティアの組織化

法人ボランティア自主事業が円滑に実施できる体制を整える。

指標3

福島子ども未来応援団を設立

福島子ども未来塾の実施体制を整える。

令和5年度 国立磐梯青少年交流の家教育事業等方針

1. 基本的な考え方

国立青少年教育振興機構の令和5年度教育事業等方針を踏まえ、国立磐梯青少年交流の家教育事業等方針を作成し、円滑に業務を遂行する。

2. 教育事業及び研修支援における重点事項

(1) 「体験の風をおこそう」運動・「早寝早起き朝ごはん」国民運動の推進

福島「体験の風をおこそう」実行委員会を組織し、教育事業や研修支援を通じて、青少年教育団体等と連携して「体験の風をおこそう」運動及び「早寝早起き朝ごはん」国民運動を連動させて取り組み、体験の重要性の普及に努め、体験活動の機会や場を充実させ、青少年の基本的な生活習慣の確立を目指す。

また、体験の風をおこそう推進月間（10月）を中心に、関係機関等と連携し、多様な事業等を展開するとともに事業等の登録を働きかける。

(2) 教育事業と研修支援が連動したプログラムの開発・拡充

① 特色あるプログラムの開発・拡充

教育テーマ「健康的な生活習慣のきっかけ作り～（食育）（運動習慣づくり）～」に基づき、教育事業と研修支援を連動されながら、地域から理解・認知され、活用されるプログラムの開発・拡充を行う。

② 国土強靱化計画に資する防災・減災教育プログラムの開発・拡充

広域防災補完拠点として認知度を広め、地域の方々が防災・減災について学べる拠点となるよう、プログラムの開発・拡充を行う。

3. 教育事業の質の充実と普及

青少年及び青少年教育指導者等に対し、国の青少年教育行政に関する基本方針等を踏まえ、先導的・広域的な観点に基づき立案し、計画的に教育事業を実施する。なお、教育事業においては、事業の成果の検証や発信のため、参加者等に対する満足度調査を実施し、80%以上の満足度を得る。

3-1. 次代を担う青少年の自立に向けた健全育成事業

(1) 社会の要請に応える体験活動事業の実施

福島子ども未来塾、親子対象の自然体験事業、防災・減災に関する事業など、社会の要請に応える教育事業を実施する。

また、自己肯定感や想像力を育む機会として日本の伝統や芸術に親しむ教育事業を実施する。

(2) モデル的事業の実施

関係機関・団体や公立青少年教育施設、大学の研究者等と連携した上で、青少年教育関係者へ成果を発信するモデル的事业を実施する。

①実践研究事業の実施方法

事業のねらいに対応した実践研究を大学の研究者等と協働で行い、評価を得る。

②地域の実情を踏まえた体験活動事業の実施方法

②-1. 特色あるプログラムの事業の実施方法

公立青少年教育施設等に学習方法が活用されるよう、企画段階から関係機関・団体と連携して実施する。また、使用した教材などの学習方法が活用されるように工夫する。

②-2. 全国高校生体験活動顕彰制度に関連する事業の実施

全国高校生体験活動顕彰制度オリエンテーション合宿を実施する。

(3) 課題を抱える青少年の支援事業の実施

①課題を抱える青少年の支援事業の実施について

子ども食堂を利用している青少年を対象に事業を実施する。

②課題を抱える青少年の支援事業の実施方法

青少年を取り巻く今日的課題に対応するため、企画段階から専門機関等と連携して実施する。また、事業の質の向上を図るため、事業後に協力関係団体等とふりかえりを行い、参加者の学びや事業の改善点などをまとめる。

3-2. 青少年教育指導者等の養成事業及び関係機関・団体等との連携協力

(1) 自然体験活動指導者養成事業（NEAL 事業）の実施

自然体験活動上級指導者（インストラクター）養成事業を実施する。

(2) ボランティア養成・研修事業の実施

教育事業等の運営協力・指導補助などを担うことのできる青少年教育ボランティアを育成する。その際、「ボランティア養成共通カリキュラム」に準拠した養成事業を実施する。

また、ボランティア・コーディネーターは、国立磐梯青少年交流の家が定めたボランティア育成ビジョンに基づき、青少年教育ボランティアとしてのスキルアップが図られるようコアボランティアミーティングを定期開催し、青少年教育ボランティアの成長を促す。

(3) 外部研修指導員等の活用

利用者に良質な体験活動を推進するために、外部研修指導員の拡充を図るなど、指導力の向上および安全管理の研修を実施する。

4. 研修支援の充実と利用拡大

より多くの青少年及び青少年教育指導者等を対象に利用団体の目的に応じた主体的で効果的な活動を行うことができるよう、広く学習の場や機会を提供する。その際、利用団体に対して「良質な体験活動」を提供するため、より効果的なプログラム提案や教育的指導・助言を行う。また、指導・助言等を通じて、体験活動や規則正しい生活習慣の重要性についての普及・啓発も併せて実施する。

(1) 研修利用の充実

「稼働率向上（利用者増加）のための数値目標の設定及び行動計画」を策定し、着実な実施に努める。また、利用状況の分析や利用団体に対する施設利用に関するアンケート調査を行い、利用促進に向けた方策を検討・実施することで、宿泊室稼働率50%を目指す。

(2) 活動プログラム等における教育的な指導及び支援の充実と検証

事前打ち合わせでは、利用団体の特性や目的を把握した上で、多様なプログラム提案を行うとともに、利用当日においても適切な指導・助言等を行う。また、小中学校利用の引率者を対象としたアンケート（施設利用に関するアンケート調査）によって、教育的効果や活動プログラムの有効度を把握しつつ青少年のよりよい成長がみられるよう、教育的な指導及び支援の充実に努める。

さらに、活動プログラム等の方法・効果が明確になるよう教材や指導資料等の工夫（活動プログラムの効果の見える化）・見直しを行うとともに、事前打ち合わせや活動プログラム等でのICT機器の活用にも努める。

(3) 学校との連携・協働による体験活動プログラムの充実

学習指導要領に基づき、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた学校との連携を強化し、「主体的・対話的で深い学び」が可能となるような活動プログラムを各年齢期に応じて提供できるようにする。

5. 安全安心な教育環境の確保

すべての業務に対して安全への意識を常に持ち、利用者や職員にとって安心できる教育環境を提供するために、安全管理担当者を2名配置する。

(1) 施設における安全管理研修の計画・実施及び安全対策マニュアルの整備

安全管理担当者は、体験活動安全管理研修に参加する。また、安全管理担当者は、国立磐梯青少年交流の家における安全研修の年間計画を策定し、すべての事業系職員が安全対策を図った上で指導ができるよう研修を実施する。さらに、「危機管理関係マニュアル点検方針」及び当該方針に含まれる研修項目等を踏まえ、安全対策マニュアルの点検、見直しを常時行う。

(2) 安全安心な教育環境づくり

利用者・職員が事故や怪我なく安全に安心して利用できる施設、利用しやすい施設を目指すために、施設整備に日々努めるとともに、教材教具・活動備品、活動場所等の日常的な点検・改善整備を通じて、衛生面も含め安全安心な教育環境を確保する。

6. 年度計画の達成

令和5年度計画に示された目標を達成するため、全職員が年度計画を十分理解し、目標を見据えて業務に取り組む。また、業務の効率化を図るため、各係においては業務推進マニュアルの整備を行う。

II 令和5年度のあらまし

1 教育事業（詳細はP. 12～32参照）

青少年教育のナショナルセンターとして、青少年の各年齢期に必要とされる体験活動（自然体験、社会体験、生活体験等）の適切な場と機会提供の場とするために教育事業を実施してきた。

「次代を担う青少年の自立に向けた健全育成事業」として、モデル的事業（特色あるプログラム事業・実践研究事業）の長期自然体験『アクティブ・ジオキャンプ 2023』（13泊14日）をはじめ、「課題を抱える青少年の支援事業」として『生活自立支援キャンプ』、「地域ぐるみ事業」として『リオン・ドールキッズプロジェクト』『スマイルばんせい』、「社会の要請に応える体験活動等事業」として『イングリッシュキャンプ』、「青少年教育に関するモデル的事業」として、学校・団体参加型『地域探究プログラム』、「ボランティア養成・研修事業」として、『ばんボラセミナー』、『ボランティア自主企画（磐梯秋のワクワク森探検）』、「東日本大震災復興支援プロジェクト」として、『第9期福島こども未来塾』①～⑥・特別回を実施した。

天候不順等の影響はあったものの、今年度から新型コロナウイルス感染症対策は緩和されたので、予定通り各事業を実施し、多くの青少年に体験の機会を提供することができた。



アクティブ・ジオキャンプ 2023

2 研修支援（詳細はP. 41参照）

令和5年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症流行前の利用者数にもどすことを目的に受入を行った。令和5年度は宿泊利用者数では昨年度比約15,000人増、日帰り利用者は約10,000人減となった。

宿泊利用者数が増加した要因としては、令和5年5月8日より新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことにより、教育旅行をはじめとする宿泊行事や自然体験、研修会等の活動がよりいっそう推進されたことが挙げられる。日帰り利用者については、宿泊利用の回復を受け、施設の宿泊利用受入に重点を置いたため、昨年度実施していた出前による指導等を減少させたため、昨年度比で減少した。

また、今年度も利用者獲得に向けた広報活動を実施した。首都圏の学校団体の令和7・8年度の新規利用者獲得へ向け、神奈川県川崎市教育委員会への訪問型広報や東京都足立区の小中学校に向けた説明会を実施した。

3 地域との連携

(1) 運営協議会の開催

令和5年度 国立磐梯青少年交流の家運営協議会名簿（敬称略）

No.	氏名	所属職名
1	市川 隆（委員長）	国立大学法人東北大学 名誉教授
2	鈴木 正和	福島県教育庁社会教育課 課長
3	鬼多見 賢	猪苗代湖の自然を守る会 代表
4	安齋 康史	福島民報社 編集局長
5	佐藤 浩昭	福島県小学校長会 会長
6	櫻井 康博	埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター 特任教授
7	高橋 敦司	福島民友新聞社 若松支社長
8	中野 充	学校法人新潟青陵大学 福祉心理学部臨床心理学科 准教授
9	張崎 貴裕	福島県 PTA 連合会副会長
10	増子 恵二	福島県家庭教育インストラクター連絡協議会 会長
11	谷 雅泰	国立大学法人福島大学 副学長・教育推進機構長
12	福士 寛樹	福島県公立学校退職校長会 会長
13	佐瀬 誠一	株式会社リオン・ドールコーポレーション 常務執行役員・人材教育部管掌
14	渡部 英一	有限会社みなとや 代表取締役社長
15	渡部幸四郎	株式会社シグマ 経営企画本部参与

令和5年度は6月と2月に「運営協議会」を実施した。6月に行った第1回運営協議会では、国立磐梯青少年交流の家グランドデザインや令和5年度の教育事業等方針について説明し、令和4年度の施設利用状況、教育事業、施設整備状況広報実績等について報告した。

その後、施設利用者を増加させる方策について協議し、委員の方々から忌憚のないご意見をいただいた。

2月に行った第2回運営協議会では、令和5年度施設利用状況、教育事業、施設整備状況、広報実績等について報告した後、令和6年度施設利用申込状況、教育事業等計画、施設整備計画、広報計画について協議した。

委員一人一人のそれぞれの立場や新たな視点から意見を伺うことにより、当交流の家での取り組みや計画を見直す機会となり、有意義な時間を過ごすことができた。

今後も第4期中期目標・中期計画を踏まえた取り組みに対して、いただいた貴重なご意見を反映させながら、次年度の運営に生かしていく。



運営協議会（R5.6.21）

(2) 福島「体験の風おこそう」運動実行委員会

令和3年度より主催をすべて「国立磐梯青少年交流の家」とし、子供たちの「直接体験」の機会の減少における「生きる力」の低下を危惧する課題に対し、地域の各種団体が連携して特色を生かした体験活動の提供及び普及啓発を行いながら、未来を担う地域の子供たちに豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの基盤を養い、家庭や地域社会に体験活動の重要性を普及してきた。今年度からは新たに福島「体験の風おこそう」運動実行委員会を立ち上げて、「体験の風をおこそう」普及啓発活動を次のとおり実施してきた。

①「スマイルばんせい」の開催（詳細P. 21参照）

②「学びいなまつり」他イベントブース出店

③「早寝早起き朝ごはん」国民運動普及啓発キャラバン（詳細P. 33参照）

④「猪苗代湖の水質向上」のため（猪苗代湖の自然を守る会）の連携（詳細P. 34参照）



スマイルばんせい秋

(R5. 10. 23)

令和5年度 福島「体験の風をおこそう」運動実行委員会名簿（敬称略）

No.	氏名	所属職名
1	宇南山 忠明	猪苗代町教育委員会 教育長
2	坂内 真隆	湯川村教育委員会 学校教育課長
3	小池 カンナ	(株) リオン・ドール・コーポレーション 取締役
4	小野 保（実行委員長）	国立磐梯青少年交流の家 所長

(3) 教育事業における実行委員会

・「アクティブ・ジオキャンプ」実行委員会（2回）

企画の段階から、運営に至るまで連携、実施をすることにより、大学教授等の専門家の指導や協力を得ることができた。事後検討会も実施し、事業の効果について話し合った。

(4) 各高等学校・大学等との連携（ボランティア活動の充実）

各種教育事業を実施するために、各高等学校（会津学鳳高等学校・あさか開成高等学校・会津第二高等学校・ふたば未来学園高等学校・小名浜海星高等学校・翔洋学園高等学校・千葉県立市川東高等学校・千葉県八千代松陰高等学校）及び各大学（福島大学・新潟清陵大学・新潟医療福祉大学・慶応大学・至学館大学・帝京大学・東京福祉大学・郡山女子大学・千葉職業能力開発短期大学校）の学生に参画をしていただいた。

(5) 青少年施設連携

① 東北青少年施設協議会

東北地区青少年教育施設の関係者が一堂に会し、各施設における日頃の実践例をもとに研究協議を行い、地区相互の連携を深めることを趣旨としている。今年度は岩手県立陸中海岸青少年の家（岩手県下閉伊郡山田町）が事務局であった。事情により当施設は欠席したため、資料の作成・送付をした。

② 東北連携会議

国立青少年教育施設東北地区4施設（岩手山・花山・磐梯・那須甲子）の連携を強化し、各施設における業務の活性化を趣旨としている。今年度は磐梯青少年交流の家が事務局となり取り組んだ。各施設のフェスティバルの協力や合同の職員研修を行う予定であったが、事情により合同職員研修は中止となった。

③ 福島県自然の家会議

福島県郡山自然の家を中心に、会津自然の家、いわき海浜自然の家、国立磐梯青少年交流の家、国立那須甲子青少年自然の家と連携会議を行ってきた。各施設の利用状況や事業報告、課題や対策についての協議や情報交換が主な活動であった。

Ⅲ 令和5年度 教育事業等

1 令和5年度 国立磐梯青少年交流の家 教育事業等実施一覧

No.	事業名	趣旨	内容	期間	対象	参加人数
1	アクティブ・ジオキャンプ 【実践研究事業・特色化事業】	自然体験活動や宿泊体験を通して、青少年の調理・食生活に対する自信、食に対する感謝の気持ちや自己肯定感を高めるとともに、日常における運動習慣のきっかけづくりになることを目的に実施する。	・野外炊飯 ・ハイキング ・登山 ・シャワークライミング	7/23(日)～8/5(土)	小学5年生 ～ 中学3年生	18名
			・おかずコンテスト発表 ・野外炊飯 ・運動習慣発表会 ・ポッチャ	10/15(日)	小学5年生 ～ 中学2年生	10名
2	生活自立支援キャンプ 【生活・自立支援事業】	体験活動を通して、子ども食堂を利用している青少年の基本的な生活習慣や自立する力を育むことを目的に実施する。	・レクリエーション ・野外炊飯 ・自然体験活動 ・ニュースポーツ	9/3(日)	喜多方市の子ども食堂 (小学生～中学生)	11名
			・雪の活動 ・レクリエーション ・ニュースポーツ	1/6(土)～8(月)	松戸市の子ども食堂 (小学生～中学生)	32名
3	磐梯地域探究プログラム 【地域探究プログラム事業】	体験活動を通して、高校生の物事を探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力を育成することを目的に実施する。	・講義「震災講話」 ・ワークショップ「HUG指導」 ・フィールドワーク「磐梯山登山」	4/28(金) 5/12(金) 5/18(木) 6/1(木) 6/2(金) 6/23(金) 9/1(金)	福島県立猪苗代高等学校生徒	57名
4	ぼんボラセミナー 【ボランティア養成・研修事業】	国立青少年教育機構のボランティア養成カリキュラムに沿った講義や演習などを通して、青少年教育ボランティアを養成することを目的に実施する。	・講義 ・演習 ・実習	5/20(土)～21(日)	16歳以上	44名
				6/25(日)	16歳以上	19名
5	ボランティア自主企画 【ボランティア養成・研修事業】	国立磐梯青少年交流の家で活動するボランティアが企画する体験活動を通して、青少年教育ボランティアとしての自覚や自主性を磨くことを目的に実施する。	・ボランティアが企画する体験活動等	10/1(日)	国立磐梯青少年交流の家で活動するボランティア	11名
6	イングリッシュキャンプ 【国際交流事業】	体験活動を通して、青少年に英語でコミュニケーションをとる楽しさを体感させ、もっと英語を学びたいという意欲を持たせることを目的に実施する。	・イングリッシュオリエンテーリング ・キャンプファイヤー ・ニュースポーツ体験	10/28(土)～29(日)	小学3年生 ～ 小学6年生	36名
7	福島子ども未来塾	体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知らせ、福島県の未来を考え行動できる青少年を育成することを目的に実施する。	・農業体験 ・被災地の復興の様子を視察 ・スポーツ体験 ・ダンスワークショップ	7/8(土)～7/9(日) 9/9(土)～9/10(日) 9/30(土) 10/7(土)～10/9(月) 11/3(金)～11/5(日) 12/9(土)～12/10(日) 2/3(土)～2/4(日)	小学5年生 ～ 中学2年生	40名
8	スマイルばんせい 【地域ぐるみ事業】	家族で体験活動を楽しむことを通じて、親子でのコミュニケーションを促し、家庭教育の充実を図ることを目的に実施する。	・創作活動 ・自然体験活動 ・文化体験	10/22(日)	家族	42家族 163名
				1/28(日)	家族	125家族 461名
9	リオン・ドールキッズプロジェクト 【地域ぐるみ事業】	自然体験を通して、身体を動かす楽しさを感じたり、家族のコミュニケーションを促したりすることを目的に実施する。	・自然体験	8/20(日)	家族	6家族 25名
10	令和6年度子どもゆめ基金説明会 【地域ぐるみ事業】	民間団体が実施する特色ある取組や、体験活動等の裾野を広げるような活動を中心に、様々な体験活動や読書活動等への助成金による支援を行い、未来を担う夢をもった子供の健全な育成の一層の推進を図ることを目的に実施する。	・助成申請の説明 ・質疑応答 ・相談	9/9(土):福島会場	申請を予定している青少年関係団体等	6団体
				9/10(日):水戸会場		6団体

2 次代を担う青少年の自立に向けた健全育成事業

(1) モデル的事业 (特色あるプログラム・実践研究事業)「アクティブ・ジオキャンプ」

1 趣旨

自然体験活動や宿泊体験を通して、青少年が食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けるとともに、体を動かす遊びや運動を継続的に行うことができるようになることを目的として実施する。

2 期日

令和5年7月23日(日)～8月5日(土)

3 会場

国立磐梯青少年交流の家(福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原7136-1)

4 参加者

18名(小学生10名、中学生8名)

5 主な活動内容

(1) 磐梯山噴火について(講義)

磐梯山噴火記念館館長の佐藤 公氏を講師として、磐梯山の歴史についてお話をいただいた。参加者は噴火によって大きな災害が起きたことや、噴火によって豊かな自然環境が育まれたことを学んだ。水を張った水槽を用いた噴火の実験などを通して、噴火について理解を深めることができた。



(2) 五色沼ハイキング(活動)

磐梯山ジオパーク協議会の田島裕子氏にガイドをお願いして、五色沼の散策を行った。参加者は前日の磐梯山の噴火についての講義の内容を思い出しながら、噴火の影響によってできた磐梯山の姿や美しい色の沼を観察することができた。



(3) 栄養講座(講義・実習)

郡山女子大学准教授の亀田明美氏を講師として、バランスの取れた食習慣の大切さや郷土食についてお話をいただいた。参加者は小学校や中学校で学習した五大栄養素や様々な食品を食べることが体に良いことを学んだ。実習では参加者がにんじんや里芋を切り、貝柱や竹の子、豆麩などを入れて、会津地方の郷土食である「こづゆ」を作った。初めて「こづゆ」を食べた参加者も多く、「初めて食べたけど、おいしい。」等の感想が聞かれた。



(4) 収穫体験(活動)

のうのば(農家)での野菜の収穫、猪苗代道の駅前いちご園でのいちご収穫、宇川ブルーベリー園でのブルーベリー収穫を行った。

農家の土屋勇輝氏を講師として、野菜を育てる工夫や努力、会津伝統野菜などについてお話をいただいた。参加者は通常のみょうりと会津伝統野菜の「余蒔きゅうり」の違いなどを実際に確かめながら収穫した。



いちご園ではミツバチを飼育して受粉に役立てていることや温度と水の管理が大切であることを学び、おいしいいちごの見分け方などを施設の職員から教えていただいた。参加者は「猪苗代プレミアム」「よつぼし」「ペチカほのか」「星のしずく」の4品種を収穫して、品種による見た目や味の違いを知ることができた。



ブルーベリー園では、ブルーベリーの品種や害虫対策などについて施設の職員から説明していただいた。参加者は木によってブルーベリーの味が異なることを、収穫を通して学ぶことができた。



(5) 野外炊飯（活動）

毎日の夕食は野外炊飯棟で参加者が準備した。主にかまどに薪を入れて火を起し、羽釜でご飯を炊いた。はじめは火を起したり材料を準備したりするのに時間がかかったが、日を迫うごとに時間が短縮され、手際よく夕食の準備をすることができるようになった。収穫した野菜をみそ汁に入れたり、焼肉を作ったりし、自分の手で収穫したものを自分で調理して食べる喜びを感じることができた。



(6) 登山（活動）

はじめに標高約1200mの雄国山に登った。研修指導員の本多勝男氏に講師をお願いして、参加者は登山道の植物や動物についての説明を聞きながら登山することができた。

次に標高約1400mの赤埴山に登った。研修指導員の渡部修一氏に講師をお願いして、参加者は赤埴山の魅力や磐梯山の爆裂壁について解説を聞きながら登山することができた。また、猪苗代スキー場のリフトを利用し、雄大な猪苗代湖を一望することもできた。



(7) カヌー・湖水浴（活動）

桧原湖沿いにある松原キャンプ場でカヌー体験と湖水浴を行った。参加者は2人1組でカヌー1艇に乗り、お互いに声をかけ合って協力してパドルを漕いだ。時折強い波があったが誰も転覆することなく、磐梯山や湖面に生える植物を眺めながら漕ぐことができた。湖水浴ではターザンロープを使って水面に飛び込んだり、みんなで一緒に浮かんだりしながら、噴火によってできた桧原湖の自然の魅力を全身で感じることもできた。



(8) 猪苗代湖一周チャレンジ（活動）

はじめに交流の家を自転車で出発し、郡山市少年湖畔の村までの約40kmを元気よくペダルを漕いで目的地である湖畔の村に到着することができた。途中の休憩や昼食では、株式会社リオン・ドールコーポレーション様から提供していただいたスポーツ飲料やゼリー、お弁当を食べて体力を回復させながら、元気よく自転車を漕ぐことができた。



次に郡山市少年湖畔の村を徒歩で出発し、交流の家まで約25kmを歩いた。この日の昼食でも株式会社リオン・ドールコーポレーション様からいただいた物品を、同じく協力いただいている株式会社Roots様の猪苗代湖畔の施設で、湖を目の前にしながら食べて、無事に交流の家へゴールすることができた。



(9) シャワークライミング (活動)

小野川不動滝駐車場から小野川に入り、岩場や川の中をゴールの不動滝に向かって遡行した。参加者は川に入る前にバディを組み、時には腰まで水につかるような水深のところや岩がぐらつくようなところでは、注意し合ったり励まし合ったりしながら進んだ。ゴールでは滝の水しぶきが激しく、大自然のシャワーを浴びることができた。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・栄養講座や様々な収穫体験を通して、参加者の食に対する意識を高めることができた。また、新聞紙と薪を使って火を起こす方法や、ご飯を炊く方法を身につけることができた。
- ・登山やカヌー、猪苗代湖一周などの様々な運動体験を通して、参加者は運動の楽しさや運動量（消費カロリー・歩数）について知ることができた。また、「今度は磐梯山に登りたい。」といった参加者の声にもあったように、新たな運動に挑戦したいという意欲を高めることができた。
- ・毎日、テントを拠点に活動した。自分たちでテントを組み立てたり、乾かしたり、収納して再び組み立てたりするなど、参加者のテントを扱う技能を高めることができた。
- ・飲食物を提供いただいた株式会社リオン・ドール様、毎日の野外炊飯で使用する薪を提供いただいた株式会社Roots 様、磐梯山噴火記念館館長や五色沼ハイキングのガイドを派遣して下さった磐梯山ジオパーク協議会様にご後援、ご協力をいただいたおかげで、14 日間の事業を実施することができた。

(2) 課題

- ・多くの活動を入れすぎたため、日によっては参加者にとってゆとりのない日程だったこともあった。各活動ごとに参加者のアンケートをとっているのので、アンケート結果をもとに活動を改善、精選していきたい。
- ・自転車で転倒してけがをした参加者がいた。また、酷暑の中、収穫体験や猪苗代湖一周で自転車を漕ぐのは熱中症の心配があった。次年度は自転車を使用せずにできることを検討したい。

「アクティブ・ジオキャンプのフォローアップキャンプ」

1 趣旨

自然体験活動や宿泊体験を通して、青少年が食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けるとともに、体を動かす遊びや運動を継続的に行うことができるようになることを目的として実施する。

2 期日

令和5年10月15日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

25名（アクティブ・ジオキャンプの参加者10名とその家族15名）

5 主な活動内容

(1) おかずコンテスト結果発表（講義）

アクティブ・ジオキャンプ参加者がキャンプ中に栄養や食材について学んだことを生かして作ったおかずを事前に提出し、それを職員が紹介した。参加者は審査を依頼してあった郡山女子大学の亀田准教授のコメントを聞いた。

(2) 野外炊飯（活動）

おかずコンテストで最優秀賞に選ばれた「はんぺんのチーズ肉巻き」を班ごとに作った。参加者はアクティブ・ジオキャンプで培った火起こしの技術を発揮して、調理活動に取り組んだ。どの班も手際よく調理活動を進め、「もちもちしていておいしい。」「ご飯にとっても合う味」と食べた感想が寄せられた。

(3) 運動習慣発表会（活動）

アクティブ・ジオキャンプ後に取り組んでいる運動について、参加者が一人ずつ発表した。「今まで以上に部活動がんばるようになりました。」「自転車であちこちに行くようになりました。」といった取り組みが紹介された。

(4) ボッチャ（活動）

アクティブ・ジオキャンプで一緒の班だった参加者同士でチームを作り対戦した。ルールが容易なため、すぐにルールを理解し、楽しそうに活動していた。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・ 亀田准教授から、参加者一人一人のおかずの栄養についてコメントをいただいた。食育に関するアンケートに「栄養のバランスが整っていてよかった。」「調理方法や工夫がよかった。」と記載があったことから、参加者は栄養や調理についてさらに関心と理解を高めることができたと思われる。
- ・ 運動習慣アンケートの「毎日、なるべく運動やスポーツをして体を動かすことを心がけている。」という項目について、「当てはまる」と回答した割合はジオキャンプ開始前 77%、ジオキャンプ最終日 83%、フォローアップキャンプ時 84%だった。このことから、体を動かす遊びや運動を継続的に行う意識が高まった状態を維持できていると考えられる。

(2) 課題

- ・ 運動習慣アンケートの「毎日、なるべく運動やスポーツをして体を動かすことを心がけている。」という項目について、3回とも「あまり当てはまらない」と回答した参加者が見られた。このような参加者にはどのような手立てが有効か、様々な案を考えていかななくてはならない。

(2) 課題を抱える青少年の支援事業（生活自立支援キャンプ）

「磐梯オータムキャンプ」

1 趣旨

体験活動を通して、子ども食堂を利用している青少年の基本的な生活習慣や自立する力を育むことを目的に実施する。

2 期日

令和5年9月3日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

18名（小学生4名、中学生6名、高校生1名、保護者2名、団体ボランティア2名、団体スタッフ3名）

5 主な活動内容

(1) 野外炊飯

参加者の多くが野外炊飯をするのは初めての体験であったが、班ごとに役割分担をして道具や材料を運び、意欲的に調理に参加しようとする姿が見られた。かまどの係になった参加者は、安全に留意しながら薪をくべることができ、それを指導者に称賛されたことで、自信をもって活動に取り組むことができた。また、ボランティアと協力しながら活動することを通して信頼関係を築くこともでき、その後の活動によりよい形で移行することができた。団体代表者からは「野外炊飯は難しいと思っていた。子供たちがこんなに積極的に活動するとは思わなかった。」という感想が寄せられた。



(2) ニュースポーツ（モルック）

簡単なルールで誰でも楽しむことができるモルックに取り組んだ。最初は、たくさんのスキttlを倒すことに夢中の参加者が多かったが、次第に狙いを定めて投げたり、投げ方を工夫したりする楽しさを見出して、より一層モルックを楽しむことができた。勝敗にこだわるあまり、落ち込んでしまう参加者も見られたが、参加者同士が励ましの声を掛け合いながら、ゲームを継続することができた。友達が投げ終わった時に、スキttlを元に戻す手伝いをしたり、「あと6だよ！」などの声をかけたりして、互いに交流を楽しみながら活動に取り組む様子が見られた。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

朝は緊張した表情の参加者が多かったが、活動を進める中でボランティアと打ち解け、場所にも慣れたりして、笑顔が見られるようになった。特に野外炊飯では、野菜を切る仕事やかまどの仕事に進んで手を挙げて取り組む意欲的な姿が見られた。また、そのような姿を指導者やボランティアに称賛されたことにより、参加者は自信をもって前向きな気持ちで活動することができた。

(2) 課題

- ・参加者の特性等について連携機関と情報を共有しながら、適切な配慮のもと活動が展開できるようにしていく必要がある。
- ・ねらいを達成できたかどうか客観的に把握するために、事業前と事業後に、自己肯定感に関する項目、基本的な生活習慣に関する項目についてアンケートをとるなど工夫したい。

「子ども食堂スノーキャンプ 2024 in 磐梯山」

1 趣旨

体験活動を通して、子ども食堂を利用している青少年の基本的な生活習慣や自立する力を育む。

2 期日

令和6年1月6日（土）～8日（月）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

32名（小学生22名、中学生10名）

5 主な活動内容

（1）五色沼スノーシューハイキング

研修指導員のもと、五色沼をスノーシューでハイキングした。参加者からは「みんなと助け合って、よい経験ができた。」「スノーシューが重くて疲れたけれど、動物の足跡が見られたりして楽しかった。」等の声が聞かれた。距離別コースを設定し、参加者が自主的に選択できるようにしたことで、参加者は各々のレベルに応じた達成感を味わうことができた。



（2）雪灯ろう作り・たき火・マシュマロ焼き

参加者は地形を生かしたり、道具を用いたりして、班ごとに思い思いの雪灯ろうを作ることができた。そこにロウソクを灯し、幻想的な雰囲気の中、たき火をしてマシュマロ焼きを実施した。参加者からは「雪をめったに見られないし、遊べないからとても楽しかった。」「たき火が暖かった。」「灯ろうのロウソクに火がつくと、とてもきれいだった。」等の声が聞かれた。



（3）自主性を大切にした活動（雪遊び、体育館でのスポーツ等）

前日のミーティングで場所と道具、可能な活動の中から、各自がどのような活動をして過ごしたいか話し合い、参加者の自主性を大切にした活動を行った。参加者からは「楽しくて友達がたくさんできてうれしかった。」「ねこのかまくらを作って、とてもよくできてうれしかった。」「大人と子供に分かれて雪合戦をしたのが楽しかった。」等の感想が聞かれた。



6 事業の成果と課題

（1）成果

アンケートから「バスケットボールなど色々な活動を選んでできて楽しかった。」「千葉と福島の温度の差が大きく、こんな量の雪は見たことがないので、とてもドキドキした。」「初めての人と仲良くなり、協力していろんなことに挑戦できてよかった。」といった感想が見られた。これらから、共に活動する仲間を受け入れて尊重しようとする態度や、自分自身で活動を選択して実施することの心地よさ、失敗を恐れずに挑戦しようとする前向きな気持ちを味わうことができたと思われる。

（2）課題

- ・参加者の特性等について連携機関と情報を共有しながら、適切な配慮のもと活動が展開できるようにしていく必要がある。
- ・ねらいを達成できたかどうか客観的に把握するために、事業前と事業後に、自己肯定感に関する項目、基本的な生活習慣に関する項目についてアンケートをとるなど工夫したい。

(3) 全国高校生体験活動顕彰制度オリエンテーション合宿「地域探究プログラム」

1 趣旨

オリエンテーション合宿を通して、高校生の物事を探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力を育成する。また、地域での実践活動を通して、郷土や自然に愛着を持ち、新たな価値を創造する高校生を育成する。

2 期日

令和5年4月28日（金）～令和6年1月27日（土）（計8日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家
福島県立猪苗代高等学校
磐梯山
磐梯山噴火記念館



4 参加者

57名（高校生57名）

5 主な活動内容

(1) 噴火災害講話・噴火実験（講義）

磐梯山噴火記念館の館長から磐梯山噴火における災害の特徴や対策についての講話を聞いた。また、ジオラマを用いた実験から、噴火した際の被害が及ぶ地域などについて学んだ。さらに災害だけではなく、噴火がもたらす自然や地形、産物などの恵みの部分についても話を聞いた。

(2) 震災講話・クロスロード（講義）

避難所運営時に実際に起きている課題や現状について聞いた。また、実際に起きた課題を題材に解決策をグループで考えて発表する活動に取り組んだ。避難所運営だけでなく、日ごろの備えが防災につながることを学んだ。

(3) HUG実践・見学（演習）

猪苗代高校3年生の進行で参加者が実際に通っている高校の図面を用いたHUG（避難所運営ゲーム）に取り組んだ。HUGの実施後には、実際に避難所運営経験のある自衛隊職員（講師）によるHUGを見学した。見学後には運営についてグループで感じたことや困ったことなどを自衛隊職員に質問することで、避難所運営について考えを深めた。

6 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・「グループで協力して解決するために工夫して活動できた」という感想から避難所運営という非日常的な課題に対しても向き合うことができていた。
- ・オリエンテーション合宿を全学年で実施したことで上級生がリーダーシップを発揮し、下級生は自身の役割を果たそうとするなど主体的に活動に取り組んでいた。
- ・各活動で積極的に話し合う姿や学び合う姿勢が見られた。

(2) 課題

- ・郷土や自然に対する愛着を持つよりも緊急時の行動など防災意識の向上が大きかった。地域の魅力を感じられるように地域で活動する方とかかわる機会を増やすなどの工夫があるとよいと感じた。

(4) 社会の要請に応える体験活動等事業「イングリッシュキャンプ」

1 趣旨

体験活動を通して、青少年が英語でコミュニケーションをとる楽しみを体感し、もっと英語を学びたいという意欲を持つことを目的に実施する。

2 期日

令和5年10月28日（土）～29日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

36名（小学生36名）

5 主な活動内容

(1) イングリッシュオリエンテーリング

参加者は、館内に設置された20問の問題を探しながら、講師や友達と協力し合って解く姿が見られた。参加者からは「班の人と協力しながら考えたり、わからない問題はわかる人にヒントをもらったりしてよかった。」「問題が英語で書かれていたけれど、先生や友達が教えてくれたので楽しくできた。」等の声が聞かれた。



(2) キャンプファイヤー

参加者は英語の歌を歌ったり、歌に合わせて踊ったり、体全体を使って英語を楽しむことができた。また、たき火を囲んでスモア作りを行い、外国の文化に触れたり、興味をもったりすることができた。参加者からは「みんなで踊るのが楽しかった。」「みんなで踊ったり、歌ったりマシュマロを焼いて食べたりして、話が進んで楽しかった。」等の声が聞かれた。



(3) ボッチャ（ニュースポーツ）

SDGsの目標10「人や国の不平等をなくそう」に迫るため、全ての人と一緒に楽しめるスポーツとしてボッチャを実施した。「Blue ball」「Red ball」「Good job」など自然と英語を用いながら、楽しそうに取り組む様子が見られた。参加者からは「体の不自由な人も遊べるからいいと思った。」「プレイ中にみんなで協力できてうれしかった。」等の声が聞かれた。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・「明るく優しく丁寧に教えてもらえて安心して活動できた。」「わからない英語があったらすぐに教えてくれてとてもうれしかった。」といったアンケートの感想から、講師を班に固定することで、一層交流が深まり、安心して活動できる環境づくりにつながったことが分かった。
- ・「英語を楽しく学べた。」「前は英語かきらいだったけど、好きになった。」といったアンケートの感想から、活動を通して英語に触れることでもっと学びたいという意欲の高まりが見られた。

(2) 課題

- ・実施後の講師とのふり返りで、講師を担当の班に固定することでの利点も多くあったが、もっと多くの参加者とも交流を深めたいという意見があった。活動の内容等を工夫するなどして、改善をしていきたい。

(5) 地域ぐるみ事業「リオン・ドールキッズプロジェクト」

1 趣旨

野菜や果物などの収穫体験を通して、家庭における食育を推進する。

2 期日

令和5年8月20日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）
宇川ブルーベリー園

4 参加者

25名（大人8名、小学生10名、未就学児7名）

5 主な活動内容

(1) 収穫体験

宇川ブルーベリー園を会場に野菜と果物の収穫体験を行った。農園の方から野菜や果物の品種や育ち方、収穫の仕方について話を聞きながら収穫体験を進めた。ミニトマト、ピーマン、アスパラ、ブルーベリーなど様々な野菜や果物を収穫することができた。参加者からは、「野菜がどのように育つのかを見られて勉強になった。」などの感想が寄せられた。



(2) ピザ作り

収穫した野菜や果物を使ってピザ作りを行った。参加家族ごとにかまどを使って火おこしから行った。参加者からは、「家にいると全員で料理をすることがないので楽しかった。」「火おこしは難しかった。初めてのピザ作りは好きな具材を自分で切つてのせておいしくできた。」などの感想が寄せられた。



6 成果と課題

(1) 成果

「家にいると全員で料理をすることがないので楽しかった。」「家族で協力して作ることができた。」という感想から、収穫体験とピザ作りが家族のコミュニケーションを深める場となったり、野外体験活動の契機となったりした。

リオン・ドールコーポレーションと提携することで、リオン・ドール店舗内にポスターを設置して、多くの人に広報することができた。また、これまで磐梯青少年交流の家の利用がなかった方に交流の家でできる事業を知ってもらう機会となった。



(2) 課題

ボランティアと参加者とが関わる場面の多くが火おこしの補助となつてしまい、ボランティアも「子供たちとの触れ合いが多いものに参加したい。」と振り返りにまとめていた。今後、家族単位で参加する事業におけるボランティアと子どもたちとの関わる場面を事前に想定し、当日どのように子供たちに関わってほしいのかを明示できるようにしていく。



(6) 地域ぐるみ事業「スマイルばんせい（秋）」

1 趣旨

家族で体験活動を楽しむことを通して、親子でのコミュニケーション促し、家庭教育の充実を図ることを目的に実施する。

2 期日

令和5年10月22日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

163名（大人80名、小学生51名、未就学児32名）

5 活動内容

福島県内の小学1～2年生を含む家族を対象に、たき火体験、金魚すくい、ばんせい探偵団、書道体験、書道パフォーマンス、読み聞かせワークショップ、ボルダリング、テント設営体験、ニュースポーツの8つの体験ブースを設置した。書道体験・書道パフォーマンス、読み聞かせワークショップは、講師を招聘し、参加者へのアドバイスを行ったり、参加者と一緒に活動したりした。ばんせい探偵団は、スマイルばんせい開催後に研修プログラムにすることを見据え、本事業にあわせて新しく実施するようにした。その他には磐梯青少年交流の家にある設備や備品を使い、たき火体験、ボルダリング、テント設営体験、ニュースポーツのブースを設置して、それぞれの体験を自由に行き来して楽しむことができた。

6 成果と課題

(1) 成果

たき火体験ではキンドリングクラッカーを使用し、参加者が薪割りから体験できるようにしたことで、親子で協力しながら薪割りとたき火体験に取り組む姿が見られた。また、「子供たちが安全に楽しむことができ、満足した。」という感想もあった。

書道体験・書道パフォーマンスと読み聞かせワークショップでは、直接講師からの専門的なアドバイスをもらったり、話を聞いたりしたことで、「初めて書道をして、興味をもってくれるきっかけとなった。」「絵本の読み聞かせの参考になった。」などの感想もあり、親子で一緒に楽しみ、満足してもらうことができた。

ばんせい探偵団は参加者の7割程度が体験し、肯定的評価が96%であった。「子供も大人も夢中でイラストを探しました。」「親子で協力して問題を解く楽しさを感じました。」などの感想が寄せられた。

これらのことから、それぞれのブースが親子でのコミュニケーションの機会を促す契機になったことが伺える。また、8ブースを設置したことで、各ブースで体験する人数が分散され、参加者が一つの体験活動に十分な時間を確保することができた。



(2) 課題

書道体験と読み聞かせワークショップは、それぞれで体験時間と参加人数を限定したため、時間の重なりが出てしまい、どちらか一方のブースにしか参加できなかった人がいた。今後はできる限り体験時間の重なりが出ないように調整したり、秋と冬にあるスマイルばんせいで、それぞれ分けて講師を招聘したりすることで、参加者が体験できる機会を増やしていきたい。

「スマイルばんせい（冬）」

1 趣旨

家族で体験活動を楽しむことを通して、親子でのコミュニケーション促し、家庭教育の充実を図ることを目的に実施する。

2 期日

令和6年1月28日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

461名（大人221名、小学生161名、未就学児79名）

5 活動内容

本事業は福島県内の3歳から小学2年生までを含む家族を対象に開催した。

屋外ではそり遊び、スノーチューブ、スノーシュー、スノーラフティング、雪遊び、たき火体験のブースを設置し、冬季ならではの活動プログラムを楽しめるようにした。また、屋内でも赤べこ絵付け体験、ばんせい探偵団、ニュースポーツのブースを設置し、親子で一緒に体験活動を行った。

6 成果と課題

(1) 成果

本事業では、降雪地域の特徴を生かした屋外体験ブースを充実させたことで、郡山市、福島市、いわき市からの多くの参加者が見られた。参加者からは「親子でなかなか体験できない雪遊びができて、子供たちが喜んでいました。」「家族で雪遊びを思う存分できて、楽しかったです。」「楽しくて盛り沢山でとても楽しかったです。」などの感想が寄せられ、降雪の少ない地域の参加者に楽しんでもらうことができた。特にスノーラフティングでは、初めての体験で90%以上満足したという感想が多く見られた。

未就学児も参加するため、筆を使った赤べこの絵付け体験を油性カラーペンを使った活動に変更し、親子で活動できるようにした。参加者からは「油性カラーペンで比較的簡単に絵付け体験ができるので、親子ともに楽しめました。」「オリジナルの赤べこができました。」「世界で一つの作品ができました。」などの感想があり、親子のコミュニケーションの機会を充実させることができた。



(2) 課題

それぞれのブースの体験活動を行う際に、「どのようにブースに行けばよいか分からなかった。」「活動ブースの場所が分からなかった。」という感想があった。家族で体験活動を楽しむ時間を十分に確保するために、案内板を各所に設置するとともに、参加者動線や各ブースにマップを閲覧できるQRコードや親子で観察できる鳥や植物の情報のQRコードを設置しておく。情報の共有や参加者のスムーズな移動をできるようにすることで、親子のコミュニケーションをより促せると考える。

3 青少年教育指導者等の養成事業

(1) ボランティア養成・研修事業「ばんボラセミナー」

1 趣旨

国立青少年教育振興機構が提供する法人ボランティア養成カリキュラムに基づいて実施し、青少年教育施設で活動できるボランティアを育成する。

2 期日

令和5年5月20日（土）～21日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

44名（高校生9名、専門学校生1名、短期大学生6名、大学生28名）

5 主な活動内容

(1) 青少年教育の理解（講義）

常磐大学の松橋義樹氏を講師にお招きし、青少年教育の発達段階に応じた体験活動の効果や意義について講義をいただいた。参加者からは「青少年教育の現状や課題について知ることができ、体験活動が必要不可欠であることが分かった」などの感想が寄せられた。



(2) 青少年教育施設におけるボランティア活動（講義）

磐梯青少年交流の家のボランティア活動内容について、磐梯青少年交流の家の先輩ボランティアが進行して、参加者が話を聞く時間を設定した。参加者からは「先輩ボランティアと話したり一緒に活動したりして、ボランティアをやる気持ちが強くなった」等の感想が寄せられた。

(3) ボランティア活動の技術（演習）

演習では、野外炊飯倉庫内の用具の配置や釜戸を使って薪に火を付ける際のポイントや安全上の留意点等について説明を受けた後、野外炊飯棟でカレー作りを行った。参加者からは「ただ外でカレーを作るのではなく、どのポイントに気を付けるのか、考えながら作ることができた」などの感想が寄せられた。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

- 先輩ボランティアから、ボランティア活動についての体験談や活動を通して学んだことを聞くことで、参加者はボランティア活動についての具体的なイメージをもち、今後のボランティア活動への意欲を高めることができた。
- アイスブレイクや野外炊飯等の演習で参加者同士が一緒に活動する時間を十分に確保する構成にしたため、初めて会った参加者同士がスモールステップでコミュニケーションをとることができた。



(2) 課題

- 野外炊飯を経験している参加者も多く、参加者の中には動画には確認しながら活動をする者もいた。そのことによって成功体験はできるが、失敗から学ぶ機会があまりなかった。ボランティアとして事業に携わった際に、児童のつまづくポイントを自ら体験できるように活動を意図的に設定したい。

「ばんボラセミナーin 水戸生涯学習センター」

1 趣旨

国立青少年教育機構が提供する法人ボランティア養成カリキュラムに基づいて実施し、青少年教育施設で活動できるボランティアを育成する。

2 期日

令和5年6月25日（日）

3 会場

茨城県水戸生涯学習センター（茨城県水戸市三の丸1-5-38）

4 参加者

19人（高校生13名、大学生3名、大人3名）

5 主な活動内容

（1）青少年教育について（講義）

青少年教育の発達段階に応じた体験活動の効果や意義について講義を行った。参加者からは「それぞれの年代（幼児・小学低／高学年生・中学生）への接し方を知ることができた。」「教育事業は参加者が主役だという認識を忘れないことが大切だと感じた。」などの感想が寄せられた。

（2）ボランティア活動の意義（講義）

ボランティア活動について、磐梯青少年交流の家での教育事業内でどのように捉えているかを例にして講義を行った。参加者からは「ボランティアは参加者にとって身近な存在であることがわかった。」「ボランティアのとしての繋がりが大切だと改めて感じた。」等の感想が寄せられた。

（3）ボランティア活動の技術（演習）

演習ではテント設営を室内で行った。参加者同士で声を掛け合いながらポールを伸ばしたり、フライシートを掛けたりしてドーム型テントを設営することができた。参加者からは「（参加者へ）指示をすることの大切さを実感した。」「どのポイントで気を付けるのか、考えながらテント設営ができた。」などの感想が寄せられた。また、本の読み聞かせの実習では読み聞かせの対象をどこに絞るか、本の持ち方やめくり方等について講義を聞き、グループになって参加者同士で読み聞かせを行った。参加者からは「自分が思っていたよりも早口になってしまった。難しい。」「ページをめくる際の手の動かし方や本の支え方は勉強になった。」等の感想が寄せられた。



6 事業の成果と課題

（1）成果

- ・ 写真や映像を使った講義だけでなく、実際の職員からの体験談や活動を通して子供たちの変容を聞くことで、参加者はボランティアに対する心構えや子供との接し方を学ぶことができた。
- ・ アイスブレイクやテント設営、読み聞かせでは、説明だけでなく実際の体験を入れることで、参加者は事業の際のテント設営や絵本の読み聞かせの有効な方法を知ることができた。

（2）課題

- ・ 読み聞かせの際に、著しく分量が多かったり、少なかったりして参加者の読む時間にばらつきがあり、他のグループと活動時間に差が出てしまった。参加者への事前連絡で5分程度の分量の絵本の持参等の呼びかけをするなど、参加者への情報提供を丁寧に進めたい。

(2) ボランティア研修・自主企画事業「ボランティア自主企画（磐梯秋のワクワク森探検）」

1 趣旨

国立磐梯青少年交流の家で活躍する法人ボランティアが主体となって教育事業を行うことにより、青少年教育ボランティアとしての自覚や自主性を育むことを目的とする。

2 期日

令和5年7月8日～10月21日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

11名（自主企画担当ボランティア7名、事業ボランティア4名）

5 主な活動内容

(1) ボランティア自主企画 立案（自主企画担当ボランティア：大学生2名、高校生1名）

学生が教育事業の企画を行うにあたり、まず当交流の家の企画指導専門職による事業の企画方法についての講義を受け、ねらいの立て方やプログラムの選定方法等を学んだ。その上で、事業に参加する子供たちにどのようなようになってほしいのか予想像を立てさせ、そのためにどんなプログラムが必要か検討を行った。協議の結果、10月1日に「磐梯秋のワクワク森探検」を開催すること決定した。

(2) ボランティア自主企画 広報物の作成（自主企画担当ボランティア：大学生5名、高校生2名）

「磐梯秋のワクワク森探検」のプログラム内容をZOOM会議システムで話し合い、チラシ作成においては、参加する子供たちがイメージを持てるような表現になっているか、保護者にも日程や準備物などの見通しがもてる表記かどうか等、参加対象と同じ年齢層の子供を養育している職員から助言をもとめて作成した。

(3) ボランティア自主企画 实地踏査（自主企画担当ボランティア：大学生2名）

「磐梯秋のワクワク森探検」で行うプログラムを、自主企画担当ボランティアで実際に行った。その後で事業当日の安全管理やスムーズな運営方法について話し合った。また、野外炊飯を行う中で焚き火台の使用法や食材の調理方法について確認し、制作物や野外炊飯が参加対象の発達段階やニーズに適合しているかを検討して、子供たちに分かりやすく教えるための説明方法の確認をした。



(4) ボランティア自主企画 当日（自主企画担当ボランティア：大学生3名、高校生1名）（当日ボランティア：大学生2名、高校生2名）（自主企画事業参加者：未就学児7名、小学生16名、大人18名）

「季節に合わせた体験活動を通じて家族で料理をしたり、交流の家の敷地内の森の中で収集した自然物で工作したりしながら、磐梯の自然に親しんでもらうとともに親子の絆を深める」というねらいのもと、日帰りの事業を行った。当交流の家の豊かな自然を知る散策や親子で共同作業する野外炊飯、フォトフレーム製作などのプログラムを行った。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・実施後のアンケートには「見通しがもてる活動で、子供たちが率先して動く姿が見られた。」「親子で参加できる森探検は新鮮でした。」といった子供の成長の発見や交流の家の豊かな自然を認知して頂いた感想が多いことから、自主企画担当ボランティアの設定したねらいを達成することができた。
- ・自主企画担当ボランティアは当日ボランティアへの助言も積極的に行い、スキルアップに繋がった。

(2) 課題

- ・アンケートの中に「トイレ休憩の時間や目安で構わないが終了時間の提示があるとよかった。」「スケジュールの都合もあるが、子供に片付けする事を教えるための時間が欲しかった。」等の記述があったことから、活動と時間の明示や休憩時間の設定、活動の後片付けまでを活動としてプログラムを設定する必要があると感じた。

4 東日本大震災復興支援プロジェクト

「第9期福島子ども未来塾」第1回

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知り、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和5年7月8日（土）～9日（日）

3 会場

- ・国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）
- ・猪苗代町内

4 参加者

40名（小学生34名、中学生6名）

5 主な活動内容

（1）猪苗代町、福島県の農業についての講話

講師から福島県や猪苗代町の農業の現状とこれからの展望についての講話を聞いた。塾生は耕作放棄地が増えたことによる問題点を知り、その解決案などを考えて発表した。また、現在、講師が会津の伝統工芸である漆器に注目しており、新しい取り組みについても話を聞くことができた。



（2）耕作放棄地と新しい取り組みについてのフィールドワーク

猪苗代町にある耕作放棄地と漆の木を植えている場所を実際に見に行った。塾生は現場を見たり、耕作放棄地の土を実際に掘ったりして、講義を通して知った農業の現状を目の当たりにした。



（3）農業体験（田んぼの草とり）

田んぼの草とりを行った。素足で田んぼに入ると、「気持ちいい」「不思議な感覚」といった声が聞こえた。稲の成長を妨げる雑草を手で一生懸命に取り除いた。また、田車という道具を紹介してもらった。田車を使うのはもちろん、見るのも初めての塾生がほとんどだったが、使い方をしっかりと聞き、丁寧に草とりを行っていた。



6 事業の成果と課題

（1）成果

- ・「耕作放棄地の土は硬くて、学校の花壇よりスコップが入らなくてびっくりした」「実際に耕作放棄地を見て、自分が大人になった時にはどうにかしたいと思った」というような意見があった。農業に関わるのが少ない都市部の塾生をはじめ、周りに多くの田園や畑が広がる地域の塾生にとっても、地元の福島県の農業について具体的に知ることができたのはとてもよい経験になった。
- ・体験で使う道具を塾生同士で声をかけ合いながら貸し借りしていた。「塾生と協力しての作業が楽しかった」という意見があり、短い時間の中でコミュニケーションをとり、仲を深めていた。

（2）課題

- ・用具の数や活動時間に限りがあるため、一人ひとりの体験の時間をもっと確保できるような日程を考えたい。

「第9期福島こども未来塾」第2回

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知り、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和5年9月9日（土）～10日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

26名（小学生21名、中学生5名）

5 主な活動内容

（1）各種スポーツ

フラッグフットボール、フィールドホッケー、カバディ、陸上競技の4種類のスポーツを体験した。なかなか体験する機会の少ないスポーツが多く、塾生からも「経験したことのないスポーツに出会えて、どれも興味深かった」「フラッグフットボールでいっぱい動けて、協力プレーや作戦を立てる人など役割もあって良かった」「カバディの魅力が分かった」というような感想があった。



（2）ユニフォームづくり、チアづくり

スポーツ大会に向けて、各チームでユニフォームと応援旗や応援歌などのチアづくりを行った。各チームのメンバーが意見を出し合い、それぞれのユニフォームができた。また、メンバーの力になるような思いのこもったチアができた。



（3）スポーツ大会

フラッグフットボール、リレーの2種目を行った。フラッグフットボールではチームで作戦を立て、攻撃側・守備側ともに戦略を練りながら競い合った。誰がボールを持っているかわからないようにしたり、守備側に的をしぼらせないようにしたりと、お互いに考えを出しながら楽しんでいた。リレーでは1日目に学んで練習した走り方を実践し、今までよりも速く走ることができた塾生が多かった。応援にも力が入り、競技している仲間もより一層力を発揮していた。



6 事業の成果と課題

（1）成果

- ・「カバディは守り方の動き、フラッグフットボールでは相手をうまくだます技などに興味が湧きました」「チームで作戦を立てて戦うのが楽しかった」というような感想があった。ほとんどの塾生が初めて触れるスポーツだったので、初めて会ってから2回目でも必然的に仲間と協力し、塾生同士の仲がさらに深まった。
- ・「今度は学校でもやりたい」と今後の日常生活にも取り入れたいという

（2）課題

- ・そのスポーツの本当の楽しい部分まで行うには、時間が全然足りなかった。塾生や保護者にとっても変化が大きい回なので、2泊3日で組むのがよい。

「第9期福島子ども未来塾」特別回

1 ねらい

- (1) 農業体験を通して農業に関する福島県の現状を知り、学びを深め、自分なりの考えを持つ。
- (2) 収穫体験を通して、作物を収穫する喜びを知るとともに、農家の皆さんに感謝の気持ちを持つ。

2 期日

令和5年9月30日（土）

3 会場

猪苗代町内

4 参加者

21名（小学生19名、中学生2名）

5 主な活動内容

(1) 農業体験（稲刈り）

第1回で活動した田で「稲刈り」と「はさかけ」を行った。活動は2人一組のペアで行った。鎌を使って稲を刈った後にペアに渡し、10束程度になると協力して麻紐で束ねた。稲刈りはペアで交互に行った。束ねた稲は稲木に運び、講師にかけてもらった。塾生は「はさかけ」の様子を観察した。



6. 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・「実際に農機具と手で収穫してみて、お米の大切さを実感できた」、「実際に鎌を使った稲刈り体験がとても楽しかった」との回答があり、実際に稲刈り体験をしたことで、作物を収穫する喜びを知ることができていた。
- ・「1回目の雑草取りは大変だったけど、今回の収穫体験ではたくさん収穫することができて、とても楽しかった」、「食べるまでどれだけ手間がかかるかよく分かった」、「収穫の喜びや、夕飯時のご飯の感謝をすることも出来ていた」との回答から、楽しみながらも農家の皆さんや収穫物へ感謝の気持ちを持つことができていたことがうかがえる。
- ・「一緒に耕したみんなに会えること楽しみにしていた」、「学校以外の年齢も違う友達ができ楽しそう」などの回答から、参加者は未来塾でできた友人関係を楽しみにしていた。



(2) 課題

- ・アンケート結果から第1回で草むしりの活動をした田での収穫体験だったが、田植えは行っていなかったため、農業のイメージが収穫だけになってしまった参加者がいた。
- ・アンケートで「田植えがやりたい」、「脱穀もしてみたい」との要望があった。開墾から播種、収穫などの一連の流れがわかるような工夫を考えていきたい。



「第9期福島子ども未来塾」第3回

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知り、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和5年10月7日（土）～9日（月）

3 会場

・相馬市内 ・浪江町内 ・福島工業高等専門学校

4 参加者

36名（小学生31名、中学生5名）

5 主な活動内容

(1) 相馬市の震災学習

相馬市の磯での磯ガニ釣り体験、防災緑地散策、漁協など海沿いの施設の見学、語り部による講話を通して、震災について学びを深めた。また、震災前後の地域産業の比較から産業の復興の様子を学んだ。



(2) 浪江町の震災学習

浪江町にある震災遺構や産業団地の見学やワークショップを通して、震災について学びを深めた。ワークショップでは福島未来について意見を出し、話し合ったことで、自分がこれからどのような行動をすればよいか考えるきっかけになった。



(3) 福島工業高等専門学校での新しい技術の実験・体験

福島工業高等専門学校を訪問し、災害が起こる原理について講義・実験をし、どのような対策をすればよいか考えた。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・「震災で被災した小学校を目の当たりにして自然災害の恐ろしさを実感した」など、実際の状況を塾生が自分の五感を使って学ぶことで、災害の恐ろしさをあらためて知ることができた。また、「日頃からの準備が必要だと思った」など、復興の状況を知ったうえで、自分がこれから担う役割についても考えることができた。
- ・「山の模型を使い、より本物に近い実験をしたことで仕組みがわかった」「メタンガスはメタン菌によって食べ物などを全部分解してエネルギーになったり、残った液体は栄養にもなったりするから無駄がないと思った」など実験や観察をしたことでなぜそうなるのかを深く考えることができ、より具体的な対策や意見を出し、福島未来を考えるための話し合いが内容の濃いものになった。

(2) 課題

- ・「災害は怖い」「実験が楽しい」で終わってしまう塾生も少なからずいた。体験したことから次のステップに考えを進めたり、実際に行動したいことを考えたりするための時間を設定したい。

「第9期福島子ども未来塾」第4回

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知り、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和5年11月3日（金）～5日（日）

3 会場

・国立磐梯青少年交流の家 ・会津若松市 ・三島町

4 参加者

36名（小学生31名、中学生5名）

5 主な活動内容

(1) 救急法・応急手当

日本赤十字社福島県支部の方から救急法と応急手当の方法について学んだ。活動班ごとに人形への胸骨圧迫やAEDを使用した救急法、塾生同士で三角巾を用いた応急手当の実践などの活動に取り組んだ。



(2) 歴史散策と伝統工芸体験

会津若松市の飯盛山、鶴ヶ城での歴史散策と三島町での伝統工芸体験を行った。飯盛山では会津若松市教育委員会文化課の方から白虎隊や戊辰戦争の話聞き、鶴ヶ城では天守閣の見学などを行った。伝統工芸体験では野山で採取された植物（ヒロロ）で縄を編み、その縄を桐のコースター上に丸めて入れて完成させた。



(3) 福島の未来について考えるワークショップ

日本青年会議所の方による福島の未来について考えるワークショップ、講話を行った。講話では福島の現状について話を聞き、今の子供たちに何が求められているかを知った。その後、福島の未来について、塾生同士がお互いに意見を出し、自分たちが何をすればよいか考えた。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・歴史散策と伝統工芸体験を通して「福島にもっと興味がわいた」「未来について深く考えた」などの前向きな考えを持つ塾生が増えた。
- ・「心肺蘇生は胸骨あたりを押し込むので、大変な作業だと思った」など、災害時における救助法として胸骨圧迫の力加減やAEDの正しい使い方を知った。また、ワークショップを通して「みんなで福島の未来について考えることができた」など、これからの福島について考える機会を持つことができた。

(2) 課題

- ・伝統工芸体験では単調な作業に飽きてしまったり、上手にできなかったりする子供たちへの声かけや意欲を継続する工夫を考えておく必要がある。

「第9期福島子ども未来塾」第5回

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知り、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和5年12月9日（土）～10日（日）

3 会場

- ・国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

36名（小学生30名、中学生6名）

5 主な活動内容

(1) チームフラッグづくり

チームごとにチーム名、メンバー、チームのロゴなどを入れたチームフラッグづくりをした。チームのメンバー同士でお互いにキーワードを出し合い、自分たちが目指すチームの形を工夫して表現していた。



(2) ダンスと合唱の練習

発表会に向けてダンスと合唱の練習を行った。始めにアイスブレイクを兼ねてHEART Globalスタッフと自己紹介をした。次にチームごとにテーマに沿って様々な状況を体で表現する活動に取り組んだ。その後、音楽に合わせてダンス練習や合唱練習、手話を使った表現活動をした。



(3) ダンスと合唱の発表会

職員や保護者に向けてダンスと合唱の発表会を行った。短時間の練習だったが、ダンスで動きをそろえるところや合唱のハーモニーがとても美しく仕上がった。



6 事業の成果と課題

(1) 成果

- ・「ダンスや運動が苦手だが、どんな事にでもチャレンジしてみようという気持ちがあまれた」などダンスが初めてだったり、苦手だったりという塾生が多い中、しっかり振り付けを覚え、大勢の前で恥ずかしがらずにダンスをしている姿が見られた。仲間とともに何か1つのものを作りあげる学びが、福島県の未来を明るくするために行動できる気持ちを育んだ。
- ・ダンス、合唱、手話などをお互いに教え合い、みんなで向上していく様子が様々な場面で見られた。
- ・「今までに見たことのない生き生きとした様子で体を動かす子供の姿を目にする事ができ、感無量でした」など、保護者は自分の子供が未来塾で頑張っている姿や、生き生きと活動している姿を見ることができた。

(2) 課題

- ・実施場所の広さなど言葉では伝わりにくいところがあるので、毎年施設見学を行い、直接打合せをする必要がある。
- ・今回は冬期間の開催だったが、体育館のような広い活動場所では暖房を入れても寒いので、開催時期については夏や秋で日程を調整したい。

「第9期福島子ども未来塾」第6回

1 趣旨

体験活動を通して、東日本大震災から復興している福島県の現状を知り、福島県の未来を考え、行動できる青少年を育成することを目的に実施する。

2 期日

令和6年2月3日（土）～4日（日）

3 会場

国立磐梯青少年交流の家（福島県耶麻郡猪苗代町字五輪原 7136-1）

4 参加者

36名（小学生30名、中学生6名）

5 主な活動内容

（1）雪中ハイキング、スノーシュー体験

交流の家の研修指導員による雪中ハイキングとスノーシュー体験を行った。雪中ハイキングでは、雪上にある小動物の足跡やふんなどを見つけることができた。スノーシュー体験では、積雪時は長靴やスノーブーツでは歩きにくいことを知り、スノーシューをはくことで格段に歩きやすくなることを実感した。



（2）調べ学習発表会

自分で決めたテーマについて調べ、まとめたことを仲間に向けて発表した。スケッチブックで発表した塾生は図や写真を使い、文字を大きくするなど見やすくする工夫をしていた。パワーポイントを使って発表した塾生はアニメーションをつけ、聞き手を引きつける工夫をしていた。仲間の発表を聞き、お互いに質問し合うなどして学び合う時間になった。



6 事業の成果と課題

（1）成果

- ・「寒い土地柄を生かした雪を使った活動があつてよかった」「たくさんの友達と雪遊びをするという貴重な経験ができた」など、雪に触れることが少ない地域の塾生も多く、冬ならではの活動を楽しむ声が多くあった。
- ・「これからの生活に活かしていこうと思える発表があつた」「身近なことでSDGsに参加できることがあると知り、緑のカーテンなど今年の夏に実践したいと思った」など、仲間の発表から自分の今後の行動を考える塾生が増えた。また、「発表を通じて、自分の意見や考えていることを人に伝える事ができてよかった」と、自分の考えを自分の言葉で誰かに伝える大切さを経験することで、主体的に行動できる意識づけを図ることができた。
- ・塾生一人ひとりがこれから頑張りたいことや目標を持つことができた。

（2）課題

- ・発表の方法を塾生に選ばせたり、一人ではなくグループでの発表にしたりするなど、塾生の個性に応じて柔軟に対応できるようにしたい。

5 福島「体験の風をおこそう」運動実行委員会事業

○事業目的

「体験の風おこそう」運動の普及啓発のために、福島県内の多くの子供たちに体験活動の楽しさを提供するとともに、保護者に体験活動の必要性や重要性を発信する。

(1) スマイルばんせい（詳細はP. 21参照）

(2) 地域イベントや他施設での「体験の風をおこそう」運動普及啓発活動

① 事業目的

「体験の風をおこそう」運動の普及啓発のために、地域のイベントに積極的に出展を行い、体験活動の重要性について広く発信をしていく。

② 期日 イベント名【場所】

- ・令和5年7月 1日（土）猪苗代マルシェ【猪苗代町天神浜】
- ・令和5年7月16日（日）学びいな夏祭り【猪苗代町運動公園】
- ・令和5年7月29日（土）磐梯まつり【猪苗代町運動公園】
- ・令和6年1月13日（土）十三日市【猪苗代町中央商店街通り】

③ 成果

新型コロナウイルス感染症対策も緩和されたため、各種イベントにおいて体験の普及啓発活動を実施した。子供たちや保護者、地域の方々に体験の機会を提供したことにより、あらためて体験活動の楽しさや重要性を実感していたくとともに、地域力向上の推進に努めることができた。



猪苗代マルシェ（R5.7.1）

(3) 「早寝早起き朝ごはん」国民運動普及啓発キャラバン

① 事業目的

子供の基本的な生活習慣の確立や生活リズムの向上につながる「早寝早起き朝ごはん」国民運動を積極的に展開することにより、子供たちの「よく体をうごかし、よく食べ、よく眠る」という当たり前で必要不可欠な生活習慣を保護者や子供、社会全体に普及啓発をしていく。

② 期日・会場・参加人数

- | | | |
|----------------|-----------------|-----|
| ・令和5年10月30日（月） | 湯川村立ゆがわ幼稚園 | 91人 |
| ・令和5年11月12日（日） | 会津若松市リオン・ドール保育園 | 51人 |
| ・令和5年11月14日（火） | 湯川村立湯川村保育所 | 25人 |

③成果

福島「体験の風をおこそう」運動実行委員会に所属いただいた湯川村教育委員会やリオン・ドールの管轄している幼稚園や保育所、保育園に募集案内を配付し、上記3ヶ所で「早寝早起き朝ごはん」国民運動を実施することができた。

今年度も絵本「よふかしおにとはやねちゃん」の紙芝居を使った読み聞かせ、早寝早起き朝ごはん体操、記念写真撮影の提供をした。参加した子供たちや職員の方々に「早寝早起き朝ごはん」の大切さを普及啓発することができた。



(4) 子どもゆめ基金説明会

① 事業目的

より多くの方々や青少年団体などに、子どもゆめ基金の趣旨を理解していただくとともに、申請の流れや申請書の書き方などの実務について知識を深めていただく。

② 期日・場所

- ・令和5年 9月 9日(土) 吾妻学習センター
- ・令和5年 9月10日(日) 水戸生涯学習センター



ゆめ基金説明会 (R5. 9. 9)

(5) その他(猪苗代湖の自然を守る会との連携)

① 地元小学校の総合学習支援

- ・令和5年6月 1日(木) 翁島小学校3～6年「猪苗代湖清掃」
- ・令和5年6月14日(水) 翁島小学校5年「猪苗代湖の水質調査1」
- ・令和5年6月19日(月) 翁島小学校5年「猪苗代湖の水質調査2」
- ・令和5年7月13日(木) 翁島小学校4年「川の水質調査」舟津川
- ・令和5年9月 5日(火) 翁島小学校6年「アサザの移植」
- ・令和5年9月12日(火) 翁島小学校3～6年「ヒシ回収活動」
- ・令和5年9月29日(金) 翁島小学校5・6年「湖岸のヨシ刈り」
- ・令和6年1月30日(火) 翁島・緑・千里小学校2年「白鳥観察」
- ・令和6年1月31日(水) 翁島・緑・千里小学校1年「白鳥観察」



猪苗代湖の水質調査
(R5. 6. 19)

② 猪苗代クリーンアクション2023の参加【計2回】

- ・令和5年4月22日(土)
- ・令和5年6月24日(土)

③ ヒシ刈りボランティアとしての協力【計6回】

- ・令和5年8月 4日(金)
- ・令和5年8月11日(金)
- ・令和5年8月25日(金)
- ・令和5年9月 1日(金)
- ・令和5年9月 8日(金)
- ・令和5年9月15日(金)



ヒシ刈り (R5. 9. 15)

IV 令和5年度 研修支援等

1 総利用者数（令和6年3月1日現在見込み）

宿泊利用団体数	447 団体	宿泊総利用者数	42,672 人
日帰り利用団体数	287 団体	日帰り総利用者数	19,311 人
合計	734 団体	合計	61,983 人

2 月別利用者数（令和6年3月1日現在見込み）

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
宿泊	5,056	4,985	5,019	6,435	6,116	7,484	4,204	687	130	8,253	4,251	2,097
日帰り	373	1,202	1,103	871	563	737	1,164	0	0	598	20	6
合計	5,429	6,187	6,122	7,306	6,679	8,221	5,368	687	130	8,851	4,271	2,103

3 宿泊団体種別利用状況（令和6年3月1日現在見込み）

種別	幼稚園 保育園	小学校	中学校	高等 学校	大学等	特別支援 学校	青少年 団体等	官公庁・ 企業等	その他
割合	2.3%	12.9%	33.1%	8.1%	2.1%	0.1%	29.0%	11.7%	0.8%

4 都道府県別利用状況（令和6年3月1日現在見込み）

種別	福島県	茨城県	宮城県	埼玉県	東京都	千葉県	新潟県	その他
割合	35.4%	15.5%	13.6%	11.9%	8.9%	8.5%	3.4%	2.8%

V 施設概要

1 職員組織

○所長	小野保
○次長	葛岡丈治
○企画指導専門職	
主任企画指導専門職	鈴木昭夫
企画指導専門職	長谷川芳幸
企画指導専門職	江川洋介
企画指導専門職	菊地諒介
企画指導専門職	坂本さやか
企画指導専門職	大島貴浩
○事業推進係	
主幹兼事業推進係長	白岩悟
事業推進係主任	飯野智
事務補佐員	熊倉美幸
事務補佐員	小泉舞
○総務係	
総務係長	野矢暁
総務兼事業推進係員	狩谷順子
事務補佐員	久保愛
技能補佐員	棚木一雄
○管理係	
管理係長	高橋幸子
管理係主任	久保草平
事務補佐員	杵鞭正光
技能補佐員	菊地賢一

(令和6年3月15日現在)

2 国立磐梯青少年交流の家のあゆみ

昭和 39. 12. 18	国立第 3 番目の青年の家設置場所を福島県耶麻郡猪苗代町に決定
41. 1. 7	第 1 期工事【本館・講堂棟・宿泊棟西側】竣工(宿泊定員 200 名)
41. 4. 4	所歌「若人の道」制定
5. 22	開所式挙行
42. 3. 30	第 2 期工事【体育館、宿泊棟東側】竣工(宿泊定員 400 名、体育館完成)
12. 10	キャンプ管理棟、総合グラウンド竣工
43. 8. 2	皇太子殿下同妃殿下御来所
44. 3. 20	第 3 期工事竣工(キャンプ場)
45. 5. 19	天皇皇后両陛下御来所、坂田文部大臣来所
8. 2	弓道場竣工
46. 3. 22	武道館竣工
5. 22	開所 5 周年記念式典挙行
47. 5. 22	門標完成
7. 27	三笠宮寛仁親王殿下御来所
51. 5. 22	開所 10 周年記念式典挙行
52. 9. 7	延宿泊利用者 100 万人突破記念式挙行
53. 3. 28	談話・喫茶コーナー設置
54. 3. 31	野外研修センター竣工
56. 5. 31	開所 15 周年記念事業(施設の一般開放)実施
57. 5. 30	猪苗代フェスティバル実施(以後平成 19 年まで毎年実施)
58. 4. 6	野口英世博士記念コーナー設置
61. 6. 7	開所 20 周年記念式典挙行
平成元. 8. 3	延宿泊利用者 200 万人達成記念式挙行
5. 12. 17	キャンプ場整備完了
7. 3. 20	食堂棟新営工事竣工
8. 9. 6 ～ 8	開所 30 周年記念事業挙行 (磐梯博覧会 '96～学術・文化、スポーツの祭典～)実施
10. 18	開所 30 周年記念式典挙行
9. 3. 14	野外炊飯棟新営、武道館全面改修工事竣工
11. 1. 22	休憩所、野外ステージ竣工
12. 3. 31	環境教育体験館・浴室工事完了
13. 3. 31	バリアフリー化工事(エレベーター、浴室)完了
13. 4. 1	独立行政法人国立青年の家本部が国立中央青年の家敷地内に設置され、それに伴い、独立行政法人 国立青年の家国立磐梯青年の家に移行
15. 12. 19	談話棟耐震改修工事完了
17. 1. 7	宿泊棟(西側)耐震改修工事完了
17. 12. 28	食堂厨房ドライシステム化工事完了

18. 4. 1	独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター、独立行政法人国立青年の家、独立行政法人国立少年自然の家が統合して独立行政法人国立青少年教育振興機構が発足し、それに伴い、独立行政法人国立青少年教育振興機構国立磐梯青少年交流の家に移行
18. 5.22	開所 40 周年
19. 1.10	宿泊棟(東側)・講師棟耐震改修工事完了
20. 4. 1	課制(事業推進課、事業支援課)より次長制へ移行
22. 3.19	講堂棟耐震改修工事完了
22. 3.30	本館耐震改修工事完了
23. 1.31	屋外給排水管他改修工事完了
23. 3.13 ～ 8.31	福島県災害対策本部の要請により東日本大震災の避難指定施設として避難者受入れ(最大 403 名/日、延べ 22,626 名)
24.11.29	災害復旧工事完了
28. 3.30	体育館 LED 照明取り換え工事完了 食堂棟天井落下防止対策工事完了
28. 5. 8	開所 50 周年記念式典・祝賀会举行
28. 7.28	屋外ステージ ボルダリングホールド設置工事完了
28.10.31	自然観察室床改修工事完了
28.11. 7	こどもの森 ツリーデッキ設置工事完了
28. 1.17	こどもの森 東屋設置工事完了
29. 1.27	食堂棟テラス改修工事完了
29. 3.14	武道館 LED 照明取り換え工事完了
29.11.13	食堂棟屋根修繕完了
29.12. 4	講堂棟シャッター修繕完了
30. 3.20	防火設備改修工事完了
30. 6.26	環境教育体験館 天体観測ドーム他改修工事完了
30.11.30	本館・宿泊棟・体育館・環境教育体験館 エレベータ改修工事完了
令和元. 6. 3	オストメイト及びベビーシート新設工事完了
元. 6.20	多言語案内看板設置新設工事完了
元. 7.31	本館照明・第 3 営火場コンセント・野球場コンセント新設工事完了
元. 8. 9	食堂棟ベランダスロープ工事完了
元. 8.31	天体プロジェクションシステム新設工事完了
2. 2.14	第 6 研修室エアコン設置工事完了
3. 8.18	国土強靱化計画の一環により地域防災保管拠点施設として、令和 2 年度補正予算でライフラインの強靱化改修工事(ライフライン改修工事、受水槽設置工事、宿舍棟エアコン設置及び宿舍棟等トイレ洋式化工事完了、講堂棟ボイラー更新工事完了、非常用発電機更新工事完了、電気設備改修工事)開始
3.12. 3	受水槽設置工事完了(令和 4 年 11 月運用開始)
4. 1.20	ライフライン改修(宿舍棟屋上防水改修)工事完了
4. 1.20	宿舍棟エアコン設置及び宿舍棟等トイレ洋式化工事完了
4. 1.31	講堂棟ボイラー更新工事完了
4. 2.25	非常用発電機更新工事完了

4. 3. 4	電気設備改修工事完了
4. 3. 4	国土強靱化計画の一環による地域防災保管拠点施設としてのライフライン強靱化改修工事完了
4. 3.18	自動ドア防護柵設置工事完了

ご協賛・ご協力いただいた皆様

株式会社 六和林業	松原キャンプ場
有限会社 関ビジネス	安積汽工 有限会社
株式会社 会津防災設備センター	八ツ橋設備 株式会社
会津リース 株式会社	有限会社 猪苗代工務店
秋山ユアビス建設 株式会社	株式会社 東北セイワ
渡部電気工業 株式会社	株式会社 セーフ観光
有限会社 松江	渡部産業 株式会社
有限会社 民芸処番匠	有限会社 森山ホトクリニック
株式会社 ミツワ	有限会社 中村金物店
ヨークベニマル 猪苗代店	ハイテックサービス 株式会社
フルテック 株式会社 会津営業所	有限会社 三交産業
株式会社 Roots	有限会社 二葉印刷
日章産業 株式会社	プリマックス 株式会社
株式会社 小山商会郡山営業所	株式会社 阿部紙工

(順不同・敬称略)

ご協賛いただきまして、誠にありがとうございます。

